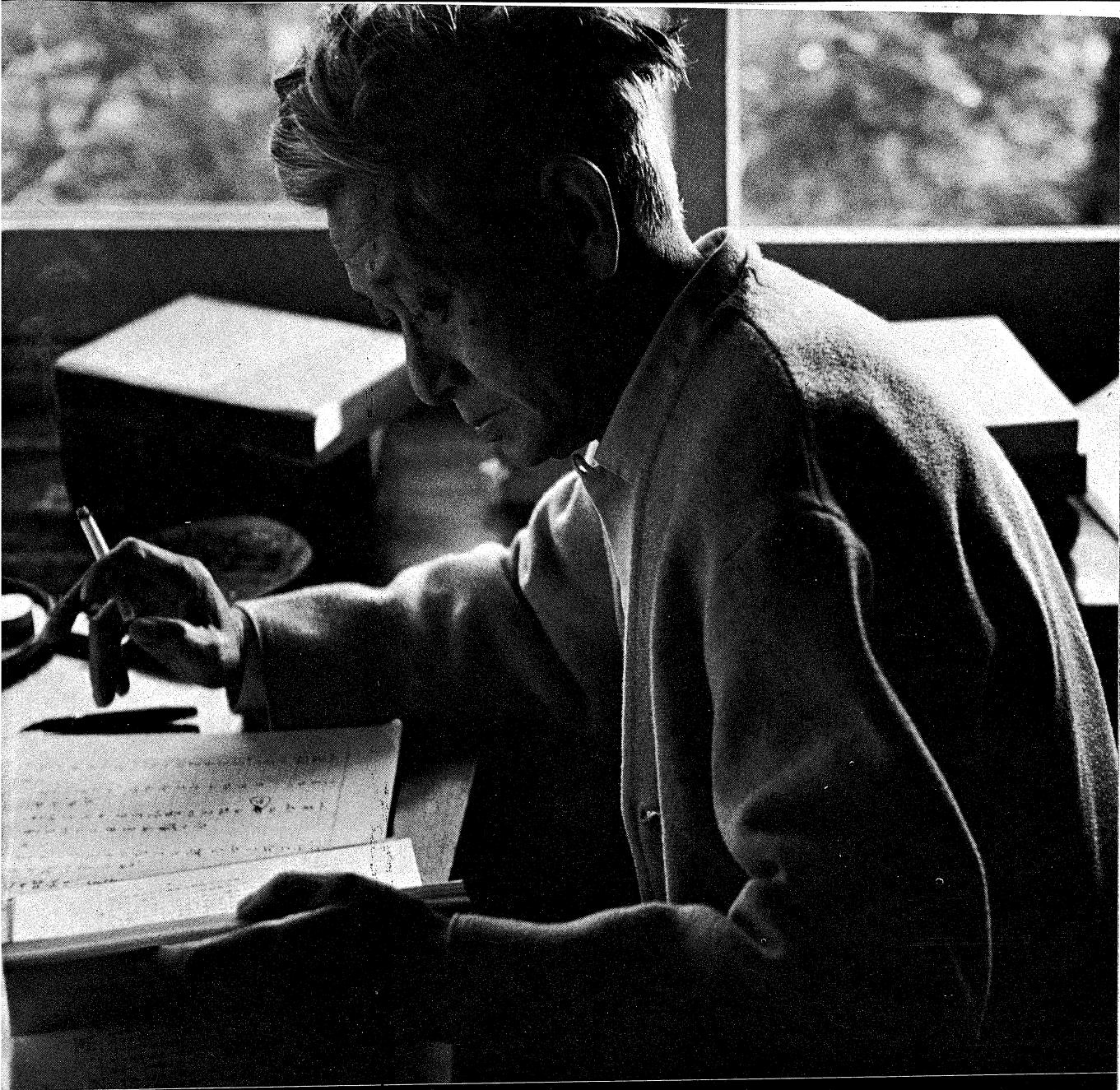


編輯 大岡昇平 中村光夫 江藤淳

小林秀雄全集

全十二卷

新潮社



先輩や知人の詩人や小説家のうちには、自分の過去の作品に、愛着を抱いてゐる人が少くないが、私にはさういふ事はない。不満を抱いてゐるだけだ。私の書く評論といふ表現形式に、その原因があるとも思ふが、そればかりではないらしい。評論の形式では、なるほど意識的な知的な構成を強ひられる傾向が強いが、だからと言つて、この構成に必須な言語の操作について、その法則なり方法なりが、私にはつきり解つた例しはない。従つて、詩人が詩的作品を書く冒険が、批評的作品を書く私に、禁じられてゐたわけでもない。不満は、私が物を書く動機の根元から湧き上つて来るものらしい。現在の私の中から発する或る感情が、不満といふ絆で過去を私にしっかりと結び付けてゐるのなら、当然、私の不満は漠然たる性質のもので、何が不満か、私に明答がある筈もない。この、はつきりと目方のかゝつた、執念深い現在感が私に過去と手が切れない事を告げる。その波の如きものに沈み、時々顔を上げてみるのが、かうして物を書き続けているといふその事だと思はれる。全集の刊行に際して、感想を求められたが、別段感想もない。編輯者諸氏に、心から謝意を表して置くに止める。

小林秀雄

刊行のことば

昭和初頭以来、四十年にわたる小林秀雄氏の業績は、すでに昭和の文学史、思想史に不動の位置を占めているが、同時にその作品はまるで昨日書かれたような新鮮さをもつて、読者を魅了する。読み返すごとに日に日に新しい、現代の古典である。

氏の仕事は、文学批評だけではなく、東西の作家論、日本古典論、音楽論、美術論、社会時評、紀行、随想、創作、翻訳の各分野にわたっている。批評と関心の対象も文体も、時代と年齢に応じて外面的には変化しているが、しかし常に人生と芸術の根源に立ちかえって考えようとする氏の意志と努力は、一貫している。

小林氏によって批評は文学になったと言われる。氏は批評という元来浮動的な様式の中で、「言葉」という媒体の機能を徹底的に考えることにより、素材と方法の間に不動なものを創り出した。批評を一つの精神の所産として、独立して評価すべきことを身をもって示したのが氏の批評活動である。

こうして批評の新しい可能性が開拓されたことは、現代文学において劃期的な事件であった。その影響はすでに広く大きく日本文化全体を覆っているが、その業績の全部が改めて知られるなら将来さらに拡大されることは明らかである。小林秀雄氏はいまや単なる批評家、文学者としてののみならず、最も信頼に値する人生の教師としての真の姿を現わそうとしているのである。

十二年前、小社は氏の主要作品を網羅した全集を上梓し、幸いに広く読者諸氏の支持を得ることが出来た。いま大岡昇平、中村光夫、江藤淳、三氏による新たな編輯のもとに、多数の新しい作品を加えた『小林秀雄全集』全十二巻を刊行し、改めてその全貌を、氏を敬愛する読者諸氏の机辺に贈ることができるのは小社の喜びであり、光栄である。大方の御支持を心から期待する。

昭和四十二年五月

新潮社

■推薦のことば

小林秀雄全集に寄せて

福原麟太郎

弘前の桜のことを書いた小林さんの随筆が二、三年前どこかの雑誌に載っていた。おそらく宿屋の一室に坐っていられるところであつたらう、座敷の中へ、一、二片の桜の花びらが舞い込んでくる。ただそれだけのことなのだが、いかにも爛漫たる桜花に埋れた昔の城下町を目に描かせ、花の匂さえも漂ってくる思をさせるものであつた。

十枚に足りないほどの長さのもので、小林さんとしてはむしろ短い文章であつたらうが、その程度のものにも小林さんは渾身の力をもつて当られるのであつたらしい。書齋は二階にでもあるのであろうか、苦吟を重ねて、やっとできて、階下へ下りて来られる。形容枯槁ここうという句がちやうどそれを語っていると思うほどやつれて、ちよつとこちらから話しかけることも憚おそかられる異様な相貌をしていられるといふことであつた。私はその話をきいて、そうに違ちがひないと思つた。そういう苦心を払うことができる天才を小林さんは持つて居られる。それは誠に羨ましい境涯である。私はいままで小林さんの書かれたものを余り読まなかつた。私ども凡俗と余りにかけ離れた才能と頭脳を持つていたからだだが、あの弘前の桜の随筆を読み、その生みの苦しみの話を聞いてから、私は小林さんのふところの中へ飛び込むことができた気持になり、それから、ベルグソンであろうが、本居宣長であろうが、モツアルトであろうが、小林さんのお話をいくらでも聞きたいと思ふようになった。

創造的な叡智の評論家

川端康成

小林秀雄君の文章は、目につけば必ず讀む。そして、必ず心になにかを興へられ、なにかに目を開かせられる。私には数少ない貴重な、敬愛する文學者である。その文章にはたくさんの思考、あるひは美感がひしめき立ち、小林君の純な強い生活がいきいきと脈打つてゐるから、再讀してまた新である。したがつて、全集として著作が揃ふのも、私にはよろこばしいことである。

■編輯について

小林秀雄全集には、これまで昭和二十五年創元社刊、同三十年小社刊の二種類があるが、著者の選択によつてすでに単行本として刊行する段階で収録に洩れたものが数多くある。そして旧全集刊行後も著者の活動は休むことなく続けられ、多くの作品が発表されている。小社はこのような氏の全業績を改めて余す所なくまとめるべく、再度の全集刊行を決定し、著者を深く識る大岡昇平、中村光夫、江藤淳の三氏に編輯を委嘱した。爾來、編輯委員会は著者の意向を汲みつつ十数回にわたる會議を開いて全集の性格、内容の討議を重ね、その結果別記内容目録に見るごときものを決定した。

編輯方針としては、著者の全業績に内容的にも時期的にもまとまつた形を与え、その特色を明らかにすることが目標とされた。まず本文が徹底的に蒐集された。「近代絵画」「考へるヒント」などの最近作は言うまでもなく、従來の単行本に洩れてゐた戦前の評論、書評、コラム、編集後記、推薦文に至るまで対象とされた。その収録については最終的に改めて著者の選択を経たが、今回新たに採用されたものは少なくない。

各巻の構成は作品の主題別分類と編年体配列とを組合わせて行われた。言うまでもなく批評というものの性質上、分類は機械的には行かな

小林君は今日、最も眞の意味で創造的な叡智の評論家であるが、その対象は常に自身の現在が全心的に惹かれるものであつて、それが讀者の向上を誘發する。必ずしも結論を出し、結果を報せるといふのではなくとも、独自の直観、慧敏、強烈な觀察の方法は、天啓のやうな魅惑を宿して、人々をとらへこんで離さないのである。

小林さんの魅力

岡

潔

私は小林さんに一度会つただけである。然しそれですっかり感心しすっかり好きになつた。もつともその時は午後一時から夜の十二時まで話し合つた。

小林さんは仏文学の辰野隆先生に師事した。先生は蔵書家であつた。愛蔵の書を開けて見るとよく煙草孔があいていたり、煙草の灰がばさまっていたりする。貸した人を考えて見ると必ず小林だつた。読み方は実に深い。考へて考へて考へ抜いてどんな深味にかくれている核心でもつかみ出さなければやめない。私は数学をしているのだが、そして小林さんは数学なんか知らない筈なのだが、徹底的に質問を重ねて到頭数学と云うものを把握した。

それでいて読書の範囲は実に広い。熾烈な知識欲がそうさせるのであろう。

ギリシヤに源を發し、流れてフランスに入り、あふれて全欧州に及んでいる文化の流れがある。ラテン文化とよばれている。小林さんは好んでここに住んでいる。プラト、デカルト、ベルグソン、アインシュタイン、ゴッホ。小林さんの口から聞くと精彩陸離としている。

此の広く深い学殖を背景とする、重厚で情熱的な人柄から出る小林さんの批評は天下第一品である。批評の仕方は先ず人を見る。この人がこう云うのはもつともだと思えるまで見る。それからそれを云い表わそうとして徹底的に言葉を探す。言葉が生きているからまた言葉を生む。とどまる所を知らない。そして実に意外なものをつかみ出して見せる。それが云われて見ればもつともである。実に面白い。一度読んで御覧なさい。

超個人的な内容

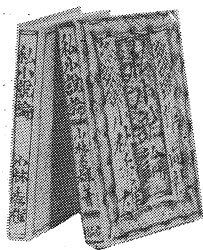
田中美知太郎

全集は何のためにあるか。著者個人を知るためのすべてのそこにあるといふことであらう。

い点が多い。たとえば、時評と作家論・批評論との区別などは微妙である。社会時評と文学批評あるいは感想との区分も同様である。しかし平板な編年体だけで編輯するよりは、主題別分類を加える方が所期の目標に近づくかと判断され、両者を併せた立体的な方法が採用された。

この結果、各作品は初期作品、文芸時評、日本作家論、西洋作家論、批評論、文学論争、社会時評、歴史論、日本古典論、音楽論、東西美術論、創作、紀行、感想、雜纂などの項目に従つて分けられ、その中で発表年次順に配列された。そしてほぼ同時期の作品群がいくつか組合わされて各巻を構成している。全体としてはほぼ年代を追っているが、ランボオ、ドストエフスキイなど著者の精神形成に極めて深いかわりを有する巻については、年次に拘らずあらゆる関連作品を集めて一巻としてある。

以上のように、本全集の編輯は、多くの新収録作品と新しい編輯方針によって、著者の業績の展望と味読とを可能にしている。



昭和10年11月 作品社刊

そのことは著者の存在が、そのやうにして知られるだけの意味をもつといふことであり、一般にその要求があるといふことである。全集は必ずしもすべてを讀まなければならぬといふものではなく、必要に応じてどこからでも讀めるといふ點にもよさがあるやうに思ふ。しかしこれは他面からすると少しこはいことである。しかし著者は、どこから攻められても、これに堪へる内實の力をもつてゐる。そのことは著者なしにも、書かれたものがそれ自體で獨立の意味をもち得るといふことである。個人全集が超個人的な内容をもつといふことである。小林秀雄全集はさういふ全集なのだと思ふ。

うれしい出版

河上徹太郎

小林秀雄の全集がまた出るとは、うれしいことだ。うれしいといふことは、友人としてだけではなく、同業者としてである。といふのは、彼の業績は、文藝評論といふものを文學の一分科として確立したこと。否、文藝評論を一つの文學的讀物としてのスタイルを造つたことである。つまり彼の文藝評論集が賣れるといふことは、評論、戯曲、日記などが文學出版の中で二流三流に見做されてゐる中で珍しいことであり、しかもそれは、彼の思想もさることながら、彼の文體がものをいつてゐるのである。

私は彼の中學時代からの友人である。彼は白金の今里に住み、私は五反田にゐた。その間に田ん圃があつて、水車が廻つてゐた。彼はマンドリンをかゝへて遊びに來た。今は私の知らない古陶や刀や鐔にこつてゐる。この次は古墳やエヂプトの神殿を何百萬圓だかで買つて來るやうになるだらう。この全集の印税がその幾分の足しになるやうに。

ほんたうの音色を出す名手

圓地文子

昔のこと、琴の絃を掛けかへに來る老人にきいた話であるが、琴柱ことばに絃を立てて、掻き鳴らすのに十三絃のどの絃のどの部分にもその絃のその場でなければ決して鳴らないほんたうの音があつて、それを微妙に弾きわけるのは稀れな名手だけだと云ふことであつた。これは琴に限らず、よい樂器にはすべて、さういふほんたうの音色が籠められてゐるものであらうが、演奏

■ 本全集の特色

収録作品 処女作「一つの脳髓」から最近稿「考へるヒント」「芸術隨想」に至る全業績、およびランボオ詩集、ヴァレリイ「テスト氏」などの主要な翻訳を収めた。特にボオドレル論、戦前の「罪と罰」論、新聞雑誌に發表された文芸時評など、今回初めて収録される重要論文も少なくない。ただし翻訳の一部、文芸時評の一部、未完のベルグソン論などは、著者の意向により省かれている。テキスト 原則として小社刊行の前「小林秀雄全集」に基いたが、その後単行本に収録されたものは、最新の版本をテキストとして用いた。単行本未収録作品はすべて初出新聞雑誌に拠つた。

校訂・ルビ 最終的に著者の訂正加筆を経てゐるが、全作品にわたって初出新聞雑誌および初版本以後の諸本を照合して、誤植は引用文に至るまで訂正した。表記法は著者の意向を入れて整理したが、各時期の特徴をもつものはあえてそのままとした。既刊本にはルビの付けられてゐるものもあるが、そのルビが必ずしも著者の意図に合つてゐるとも限らないので再検討し、読み易くするたため難読文字にはルビを付した。

後記 各巻に後記を付す。大岡昇平、中村光夫、江藤淳の編輯委員と河上徹太郎、福田恆存、吉川逸治の各氏による解説と、吉田熙生氏によ

者の技倆によつてはほんたうの音色は外に現はれないし、聞く者の耳もよほど肥えてゐなければ、眞物の音色とさうでないものとを區別することは出来ない。

小林秀雄さんの資質は優れた樂器の微妙な勘所を抑へて、その内に籠められてゐるほんたうの音色を十二分に發揮させる名手のやうな感じがする。

小林さんはいつも極く自然な姿勢で人生に探しものをしてゐる人だ。探してゐるものは文學でも美術でも音樂でも……乃至人間でもいつも眞物である……といふより、眞物だけが小林さんの眼に吸ひ込まれるといふ方がほんたうかも知れない。

小林さんはいつも動いてゐる。溪流のやうに烈しく岩を噛み、岸を濯あぶつて奔流しつゞける。しかし、溪流が絶えず鳴り立ちながら騒がしくやうに、小林さんは靜かである。

小林さんの文學が現代にあることは日本の誇りであると思ふ。

小林秀雄氏頌

三島由紀夫

近代日本文學史において、はじめて、「藝術としての批評」を定立した人。

批評を、眞に自分の言葉、自分の文體、自分の肉感を以て創造した人。

もつとも繊細な事柄をもつとも雄々しく語り、もつとも強烈な行爲をもつとも微妙に描いた人。

美を少しも信用しない美の最高の目きき。獲物のをのきを知悉した狩人。

あらゆるばかげた近代的先入観から自由である結果、近代精神の最奥の暗所へ、づかづかと素足で踏み込むことのできた人物。

行爲の精髓を言葉に、言葉の精髓を行動に轉化できる接點に立ちつづけた人。

認識における魔的なものと、感覺における無垢なものとを兼ねそなへた人。

知性の向う側に肉感を發見し、肉感の向う側に精神を發見するX光線。

遲疑のない世界、後悔のない世界、もつとも感じ易く、しかも感じ易さから生ずるあらゆる病氣を免かれた世界。

一個の野蠻人としての知性。

一人の大常識人としての天才。

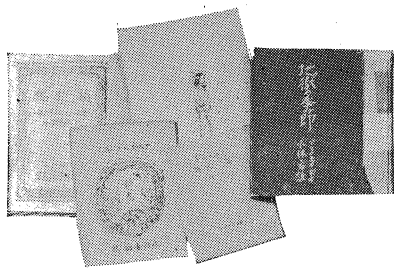
る文獻的解題（初出、収録、その他の参考事項）である。

年譜・書誌 著者四十年の文學活動を一望できるよう新しく年譜を編み、主要著書については書誌を作成して最終巻に付す。

図版 美術関係の巻においては特に本文で言及された美術作品の原版、写真版を多数挿入した。各巻にはそれぞれ収録作品執筆時期の著者の写真が取められている。

造本 著者の全業績を長く残すために、堅牢かつ格調高い造本とした。背皮金箔押し、カバシ、アセチロイドつき、函入りの豪華愛蔵本である。

月報 各巻付録の月報には、著者を深く識る人々の思い出・感想、著者の各時期を伝える様々な写真のほか、その巻に関係する参考文献の目録を掲載する。なお最終巻月報には収録作品名の総索引を付す。



ランボオ論とランボオ詩集

『小林秀雄全集』を編輯して



大岡昇平 中村光夫
江藤淳の各氏

体系のない体系の奇蹟

大岡昇平

小林さんを知ってから四十年になる。大体いつもその顔を見、その声を聞きながら、その蔭の中で、私は生涯の大部分を過したので、これは実に幸運なことだった。

小林さんは決して先生のような顔をしない人だが、たまにこれだけは教えといてやろうというつもりでいつている時は、声の調子でわかった。そういう声を聞きすぎているのでこの全集の編輯には適任ではないのではないかとも思ったが、この機会に小林さんの作品を読み返してみ、四十年知らずにいたことが、ずいぶんあるのを知った。

小林さんは生涯のさまざまな時期に、さまざまな事態に直面して、自分の精神の取る姿を厳しく見張っていた。自分のいいこと、いうべきことだけを探し出して、ほかのことはいかなかった。いつも自分を乗り越えながら、自分を育てて行った。この全集はその時々々の脱皮の跡だが、その結果が、まるで一つのプランによって築かれた建築物のように、がっちり組み立てられた、「体系のない体系」になっている奇蹟に、人は驚くべきだと思う。

しかしこの孤立した塔が、私がいつも聞いていた、一つの優しい声を出しているのを聞き分ける人がいれば、その人は小林さんの作品の読み方を知ったのである。そういう人にだけほんとうのことを教える調子を、小林さんの文学は持っている。

小林文學の高みに昇るために

中村光夫

小林氏はいま本居宣長に關する大きな仕事にかかっています。これは完成のあかつきには、

略年譜

明治三十五年 神田猿樂町に生まる。

大正十三年(二十二歳) 処女作「一つの脳髓」富永太郎と親交。

大正十五年(二十四歳) ランボオ論を書き。志賀直哉論を構想。

昭和二年(二十五歳) 「悪の華」一面。

昭和三年(二十六歳) 東大仏文科卒業。

昭和四年(二十七歳) 「様々なる意匠」

「改造」の懸賞に入選。「志賀直哉」。

昭和五年(二十八歳) 春より一年間「文芸春秋」時評を連載。ランボオ「地獄の季節」を刊行。

昭和六年(二十九歳) 「おふえりや遺文」。

「文芸評論」刊行。

昭和七年(三十歳) 「Xへの手紙」。明治

大学文芸科講師に就任。

昭和八年(三十一歳) 林房雄・川端康成・

武田麟太郎らと「文学界」創刊。ドス

トエフスキイ作品論の執筆を始める。

昭和九年(三十二歳) ヴァレリイ「テス

ト氏」刊行。結婚。

昭和十年(三十三歳) 「文学界」編輯責任

者となり、「ドストエフスキイの生活」

を連載。「私小説論」刊行。

昭和十一年(三十四歳) 「作家の顔を契

機として正宗白鳥と論争。

昭和十二年(三十五歳) 「菊池寛」。中原

中也死す。長女明子生る。

昭和十三年(三十六歳) 戦争中の中国に

渡る。また朝鮮・満洲を旅行。「杭州」。

創元社顧問となる。「文学」刊行。

昭和十四年(三十七歳) 「ドストエフスキ

イの生活」刊行。社会時評を書く。

昭和十六年(三十九歳) 「歴史と文学」刊

行。古美術に親しむ。

昭和十七年(四十歳) 「西行」など日本古

たんなる古典研究といふやうなものでなく、日本の文化の進路に大きな影響を及ぼすものにならうと思はれます。

かういふ第一級、(あるひは第二級)の仕事を一方でつづけながら、他方、全集がいくども形をかへて出版されるのは、特異のことで、氏の獨自性がおのづからそこに出てゐます。

昨年氏の岡潔氏との對談が世評をよび、ひろくよまれましたが、あの背後には氏が多年の努力を傾け、人眼につかぬ形でおいてあるベルグソン研究があります。

これは偶然のことですが、氏の論文のひとつひとつにはこれに似た用意があります。そこでは書かれたものより、書かずに葬られたことの方がいつもはるかに多いのです。

氏を理解するに全集が必要な所以です。氏の仕事で今後にのこされたものが、どれほどあつても、その高みに昇るには、このこれまでの作品を系統的によむことが不可欠の前提でせう。

強烈な人格への直接の手がかり

江 藤 淳

かつて「小林秀雄」を書いたとき、私は小林秀雄というひとりの人間にめぐりあいたいと思つていた。文壇に流布されている神格化された小林氏の權威や、氏に仮託されたイデオロギイには反撥することもできるが、ひとりの人間はこれを理解しようとする以外にない。そして理解しようとするとき、人はまず自ら心を開かなければならない。かりにそうして開いた心に、どんな苛酷な毒が注入されようとも、それには甘んじて耐えなければならぬ。私はそう思いながら小林氏の作品を熟読し、そこから浮かびあがつて来るひとりの人間の姿を描こうと努めた。

大岡昇平・中村光夫両氏とともに編輯の任にあつたこの「小林秀雄全集」を、私は今度は一読者として、もう一度そういう気持ちで読み直してみたいと思つてゐる。過去二回の全集には未収録の作品がここには数多く収められているし、小林氏の足跡は近年の小林秀雄研究の進展にともなつて一段と明瞭になつてゐるからである。私はこの全集が、概念や神話をわずらわされない多くの読者を、小林秀雄というひとりの「魅力的な個性」に、昭和の文学を論じるなら好むと好まざるにかかわらず絶対に避けて通ることのできない「強烈な人格」に、「直接推参させる手がかり」となることを願つてやまない。

典論を發表。

昭和十八年(四十一歳) 二度にわたつて朝鮮、滿洲、中国などを旅行。

昭和二十一年(四十四歳) 『無常といふ事』刊行。明治大学教授辭任。

昭和二十二年(四十五歳) 『モオツアルト』刊行。「ランポオIII」。

昭和二十三年(四十六歳) 『罪と罰』について。

昭和二十四年(四十七歳) 『小林秀雄對話録』『私の人生観』刊行。

昭和二十五年(四十八歳) 第一回の『小林秀雄全集』刊行。

昭和二十六年(四十九歳) 『真贋』刊行。『小林秀雄全集』により芸術院賞受賞。

昭和二十七年(五十歳) 『ゴッホの手紙』刊行。これにより翌年読売文学賞を受く。ヨーロッパ旅行に出發。

昭和三十年(五十三歳) 第二回の『小林秀雄全集』を刊行。

昭和三十三年(五十六歳) 『近代絵画』刊行。野間文芸賞受賞。ベルグソン論の連載を始めたが、現在未完。

昭和三十四年(五十七歳) 芸術院会員となつた。『感想』刊行。

昭和三十八年(六十一歳) 作家同盟の招待によりソヴエトを旅行。文化功勞者として受賞。

昭和三十九年(六十二歳) 『考へるヒント』刊行。『白痴』について刊行。

昭和四十年(六十三歳) 『本居宣長』の連載を始める。岡潔との對話「人間の建設」刊行。

昭和四十一年(六十四歳) 『ドストエフスキイ』『芸術随想』刊行。

昭和四十二年(六十五歳) 本居宣長論連載執筆中。

■全十二巻の内容

第一巻 様々なる意匠

解説・中村光夫 解題・吉田熙生

【文芸時評Ⅰ】 様々なる意匠 アシルと亀の子ⅠⅤⅥ 文学は絵空ことか 横光利一 物質への情熱 マルクスの悟達 文芸時評 心理小説 文学批評の科学性に関する論争 再び心理小説について 現代文学の不安

【批評について】 ナンセンス文学 新しい文学と新しい文壇 感想 批評家失格ⅠⅡ 我まな感想 もぎとられたあだ花 フランス文学とわが国の新文学 純粹小説といふものについて 批評について 逆説といふものについて 同人雑誌小感 年末感想 作家志願者への助言 文学批評について 文芸時評 手帖ⅠⅤⅣ

【作家論Ⅰ】 室生犀星 谷崎潤一郎 「安城家の兄弟」 辯明—正宗白鳥氏へ 正宗白鳥の近作について 梶井基次郎と嘉村礒多 嘉村君のこと

第二巻 ランボオ・Xへの手紙

解説・大岡昇平 解題・吉田熙生

【初期作品】 一つの脳髓 女とボンキン 紀行断片 佐藤春夫のデレンマ 芥川龍之介の美神と宿命 「悪の華」一面

【創作】 からくり 眠られぬ夜 おふえりや遺文 Xへの手紙

【富永と中原】 富永太郎 富永太郎の思ひ出 中原中也の「骨」 中原中也の「山羊の歌」 中原中也の遺稿 中原中也 死んだ中原 中原中也の思ひ出 夏よ去れ

【ランボオ】 アルチュール・ランボオⅠⅢⅣ リヴィエルの「ランボオ」 中原中也「ランボオ詩集」 「ランボオ詩集」後記 「地獄の季節」後記 ランボオ詩集(翻訳)

【ヴァレリイ】 ヴアレリイの事 ヴアレリイ「詩学叙説」 「テスト氏」の方法 テスト氏(翻訳)

第三巻 私人説論

解説・中村光夫 解題・吉田熙生

【文芸時評Ⅱ】 小説の問題ⅠⅡ 故郷を失った文学 批評について 私人小説について 文学界の混乱 新年号創作読後感 レオ・シェストフの「悲劇の哲学」 林房雄の「青年」「紋章」と「風雨強かるべし」とを読む 文芸時評に就いて 再び文芸時評に就いて 私人小説論 新人Xへ 現代小説の諸問題 文芸批評の行方

【文芸時評Ⅲ】 文芸月評ⅠⅤⅥ
【西洋作家論Ⅰ】 アンドレ・ジイド 「ハムレット」に就いて アランの事 僕の手帖から 「パリュウ

■各巻について

本全集は全十二巻より成り、収録作品中の代表的な作品名をもって巻名としてある。

第一巻 初期評論集である。大体昭和四年から同七・八年までの文芸評論を収める。文壇登壇作である「様々なる意匠」から「現代文学の不安」に至る文芸時評は、昭和初頭の文学界において著者が自己の主題を提示しつつ批評家としての地位を確立して行く過程である。「批評について」のグループはこれと平行して書かれた批評論と文学論的エッセイであり、「作家論Ⅰ」も同じく初期の時評的作家論である。

第二巻 この巻は「様々なる意匠」以前の初期作品と著者の数少ない創作、および著者の傾倒したランボオ、ヴァレリイ論、およびその翻訳が集められている。「富永と中原」も著者の自己形成に深いかわりを持った詩人たちである。この巻は作品の時期区分よりも、著者の青春を中心として構成されているとも言えよう。

第三巻 第一巻に接続する中期の文芸評論集である。「文芸時評Ⅱ」は昭和七・八年から十二年ころに至る時評で、時代の圧力を受けて激動する文壇に、次々に問題を提起して行く著者の姿が現われている。「文芸時評Ⅲ」は従来単行本に収録されなかった新聞月評のグループである。「西洋作家論Ⅰ」には、ランボオ、ヴァレリイ、ドストエフスキ関係以外の作家

ド」に就いて「ルナルの日記」 トルストイの「芸術とは何か」 アンドレ・ジイド人及び作品 フロオベルの「ボヴァリイ夫人」 グウルモン「哲学的散步」 ジイド「ソヴェト旅行記」 豊島与志雄「メデューズ号の筏」 雑誌「わが毒」についてデカルト讃 ジイド「芸術論」 アランの「芸術論集」

【感想Ⅰ】 故古賀春江氏の水彩画展 カヤの平 初夏 初舞台 失敗 山 葛温泉 湯ヶ島 文科の学生諸君へ 僕の大学時代 処女講演

第四卷 作家の顔

解説・河上徹太郎 解題・吉田熙生

【作家論Ⅰ】 志賀直哉 私信—深田久弥へ 井伏鱒二の作品について 辰野隆「さ・え・ら」 佐佐木茂素「困った人達」 堀辰雄の「聖家族」 金文輯君へ 佐藤春夫論 林芙美子の印象 谷崎潤一郎「文章読本」 横光利一「覚書」 「夜明け前」について お目出度い残酷さ 谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」 武田麟太郎「市井事」 石坂洋次郎の「麦死なず」 林房雄「浪漫主義のために」 川上喜久子「滅亡の門」 吉屋信子「女の友情」 菊池寛論 林房雄「壮年」 「福翁自伝」 島木健作の「生活の探求」 志賀直哉論 島木健作の「続生活の探求」を廻つて 舟橋聖一「岩野泡鳴伝」 三好達治 山本有三氏の「真実一路」を廻つて 正宗白鳥「文壇的自叙伝」

【文学論争】 作家の顔 岸田国士の「風俗時評」其他 思想と実生活 中野重治君へ 文学者の思想と実生活 戸坂潤氏へ「日本的なもの」の問題 小熊秀雄君へ 窪川鶴次郎氏へ 酒井逸雄君へ

【感想Ⅱ】 短歌について 現代詩について 言語の問題 演劇について 「罪と罰」を見る 野上豊一郎の「翻譯論」 文化と文体 現代作家と文体 実物の感覚 日本語の不自由さ 女流作家映画批評について 現代の美辞麗句 読書について 読書の工夫

【社会時評Ⅰ】 井の中の蛙 戦争について 佐藤信衛「近代科学」 雑誌 杭州 杭州より南京 支那より還りて 蘇州 従軍記者の感想 火野葦平「麦と兵隊」 現代日本の表現力 宣伝について

【文学界】後記 「文学界」後記

第五卷 ドストエフスキイの生活

解説・河上徹太郎 解題・吉田熙生

【ドストエフスキイの生活】 ドストエフスキイの生活

【雑考】 私信—中山省三郎氏へ ノイフェルト「ドストエフスキイの精神分析」 マリ「ドストエフスキイ」 ドストエフスキイの時代感覚 「ドストエフスキイの生活」について ドストエフスキイのこと ハムレットとラスコオリニコフ ドストエフスキイ七十五年祭に於ける講演 ネヴァ河

第六卷 ドストエフスキイの作品

解説・江藤 淳 解題・吉田熙生

【ドストエフスキイの作品】 「永遠の良人」 「未成年」の獨創性について 「罪と罰」についてⅠ

論・書評がまとめられている。「感想Ⅰ」は著者が自ら生活を語ったものを中心とする。



「文藝評論」三冊 昭和6〜9年

第四卷 第三巻と重なり合いながら、重点を「私小説論」以降に置いて編纂された巻である。ただし「作家論Ⅱ」にはやや溯つて、昭和四年の「志賀直哉」からの論文・書評を集めた。書評には今回初めて収録されたものが多い。「作家の顔」は著者の作家論の方法を意味するが、同時に正宗白鳥との有名な「思想と実生活」論争の端緒となった論文名でもある。その意味でこの巻には中期の論争が一括して収められている。ここにも従来単行本では見られなかった論争文が数篇新たに収録された。「感想Ⅱ」は文体論映画演劇論、読書論などである。この第四巻の時期は丁度支那事変勃発の時であり、著者もこの頃中国に渡っている。「社会時評Ⅰ」はこの第一回の中国紀行を中心に構成されている。「文学界」後記」は著者が編輯責任者として活動した雑誌「文学界」の編輯後記である。

第七卷 歴史と文学

断想 「白痴」についてⅠ 「地下室の手記」と「永遠の良人」 「悪霊」について 「カラマアソフの兄弟」 「罪と罰」についてⅡ 「白痴」についてⅡ

解説・大岡昇平 解題・吉田熙生

【社会時評Ⅱ】 満洲の印象 クリステイ「奉天三十年」 現代女性 疑惑Ⅰ 慶州 事変と文学

疑惑Ⅱ 外交と予言 大嶽康子「病院船」 学者と官僚 日比野士朗「呉淞クリーク」 神風といふ言葉について イテオロギイの問題 アラン「大戦の思ひ出」 清君の貼紙絵 歐洲大戦 処世家の理論 事変の新しさ ヒットラーの「我が闘争」 マキアヴェリについて 文学と自分 「戦記」随想 モロア「英国史」 「歩け・歩け」 沼田多稼蔵「日露陸戦新史」 戦争と平和 「ガリア戦記」ゼークトの「一軍人の思想」について 文学者の提携について

【歴史と文学】 エーヴ・キュリー「キュリー夫人伝」 歴史の活眼 モロア「英国史」について

【維新史】 歴史と文学 伝統 伝統について

【作家論Ⅲ】 「仮装人物」其他 小川正子「小島の春」 鏡花の死其他 岸田国士「鞭を鳴らす女」其他 期待する人 野沢富美子「煉瓦女工」 島木健作論 林房雄 川端康成 林房雄の「西郷隆盛」其他

【感想Ⅲ】 文章について 感想 道德について 環境 オリソピア 自己について 芸術上の天才について 感想 匹夫不可奪志 パスカルの「パンセ」について

第八卷 無常といふ事・モオツアルト

解説・江藤 淳 解題・吉田熙生

【無常といふ事】 当麻 無常といふ事 平家物語 徒然草 西行 実朝

【モオツアルト】 バッハ モオツアルト 表現について メニューヒンを聴いて ヴァイオリニスト 蓄音機 ペレアスとメリザンド バイロイトにて

【感想Ⅳ】 嵯峨沢にて 現代文学の診断 死体写真或は死体について 翻訳 文化について 同姓同名 知識階級について 吉田満の「戦艦大和の最期」 感想 感想 秋 感想 醉漢 蘇我馬子の墓 信仰について 詩について 「きけわだつみのこゑ」 年齢 人物評 金閣焼亡 瓢鮎図

【作家論Ⅳ】 真船君の事 菊池さんの思ひ出 横光さんのこと 島木君の思ひ出 「キティ颱風」を読む 「ひかげの花」 「武蔵野夫人」 菊池寛 「菊池寛文学全集」解説

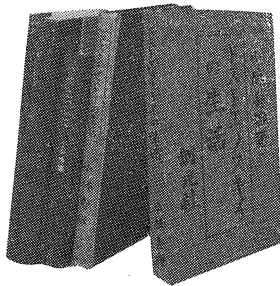
【西洋作家論Ⅱ】 チェホフ トルストイ 或る夜の感想 辰野隆訳「フィガロの結婚」を読む 好色文学 「ベスト」 ニイチエ雑感 「ヘッダ・ガブラー」

第九卷 私の人生観

解説・江藤 淳 解題・吉田熙生

第五卷 第五・六巻は著者のライフ・ワークであるドストエフスキイ研究の巻である。作品論は第六巻にまとめ、第五巻は「生活」および時期を問わずドストエフスキイ関係の諸論考を収めた。(参考図版・原色版一葉)

第六巻 著者が三十年にわたってドストエフスキイの作品と取り組んだ足跡である。そのすべてを发表順に一巻に収めた。戦前の「罪と罰」についてⅠは初収録である。



ドストエフスキイ論

第七巻 第四巻に続く時期、すなわち支那事変から太平洋戦争までの諸評論を収めた。「社会時評Ⅱ」は著者がこの困難な時期にあくまで文学者として処した記録である。「歴史と文学」のグループはこのころから明らかとなった歴史と伝統への意志を物語る。「作家論Ⅲ」「感想Ⅲ」には次巻に文芸時評から離れて円熟したエッセイストをめざす著者の姿がうかがわれる。

第八巻 「無常といふ事」モオツアルト」いずれも改めて説明の要のないほど有名な

【私の人生観】 私の人生観 政治と文学

【美術論Ⅰ】 骨董 真贋 埴輪 古鐔 徳利と盃 壺 鐔 高麗剣 染付皿 信楽大壺

【感想Ⅴ】 感想 悲劇について 崑ちゃん 中庸 「賭はなされた」を見て 「天井棧敷の人々」を見て 喋ることと書くこと 自由 読書週間 ゴルフ随筆 栗の樹 感想 常識 教育 理想 民主主義教育 文芸春秋と私 エヴェレスト 吉田茂 蟹まんちゆう 美を求める心 鎌倉 感想 国語といふ大河 写真 ゴルフの名人 スポーツ もみぢ 人形 縦ノ木 天の橋立 お月見 季江利チエミの声 スランプ 踊り さくら 見物人 ソヴェトの旅 花見 DDT オリンピックのテレビ 常識について

第十卷

ゴッホ

解説・吉川逸治 解題・吉田熙生

【ゴッホ】 ゴッホの手紙 ゴッホの墓 ゴッホの病気 ゴッホの絵 「ゴッホ書簡全集」

【美術論Ⅰ】 光悦と宗達 梅原龍三郎 鉄斎Ⅰ 鉄斎Ⅱ 雪舟 高野山にて 偶像崇拜 鉄斎Ⅲ 鉄斎の扇画 鉄斎Ⅳ 梅原龍三郎展をみて

【紀行】 エジプトにて ピラミッドⅠ ギリシアの印象 ピラミッドⅡ ギリシア・エジプト写真紀行

第十一卷

近代絵画

解説・吉川逸治 解題・吉田熙生

【近代絵画】 近代絵画

【美術論Ⅲ】 ピカソの陶器 マチス展を見る セザンヌの自画像 ほんもの・にせもの展 マルロ オの「美術館」 私の空想美術館 「近代芸術の先駆者」序

第十二卷

考へるヒント

解説・福田恆存 解題・吉田熙生

【考へるヒントⅠ】 悪魔的なもの 常識 プラトンの「国家」 井伏君の「貸間あり」 読者 漫画 良心 歴史 見失はれた歴史 役者 或る教師の手記 ヒットラーと悪魔 平家物語 プルターク

英雄伝 福沢諭吉 還暦 天といふ言葉 英雄伝 福沢諭吉 還暦 天といふ言葉

【考へるヒントⅡ】 好き嫌い 言葉 忠臣蔵ⅠⅡ 学問 徂徠 辨名 考へるといふ事 ヒューマニズム 哲学 天命を知るとは 歴史 物 批評 道徳

【感想Ⅵ】 無私の精神 吉川英治さん 青年と老年 読者のために 「正宗白鳥全集」「ボオ全集」 後藤亮「正宗白鳥、文学と生涯」「ヴァレリイ全集」を推す 詩と教智

年譜・書誌

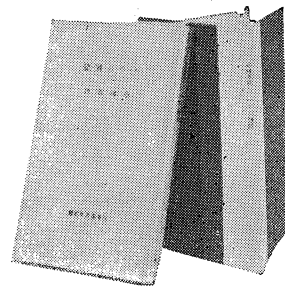
な作品である。「モオツアルト」のグループには音楽関係のエッセイが集められている。「感想Ⅳ」は大体昭和二十五年までのエッセイを収め、「作家論Ⅳ」「西洋作家論Ⅱ」には、それぞれごく最近のものを除いて戦後のものが一括されている。(参考図版・写真版二頁)

第九巻 「私の人生観」「政治と文学」という戦後の二大論文を中心に、「美術論Ⅰ」、「感想Ⅴ」が配されている。「美術論Ⅰ」は骨董関係であり、「感想Ⅴ」は昭和二十六年以降今日に至るもので、「ソヴェトの旅」「常識について」など講演と「考へるヒント」以外のエッセイである。小品にも著者の自由な文明批評・人間批評を味わうことができる。(参考図版・写真版八頁)

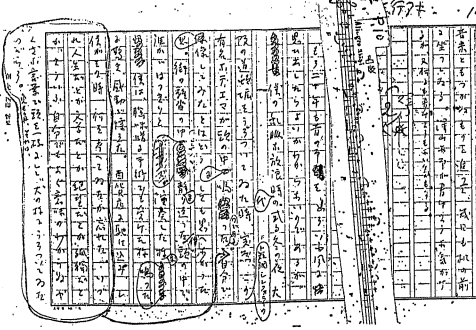
第十巻 美術の巻の第一である。「ゴッホの手紙」を中心とするゴッホ論に、梅原龍三郎、鉄斎など日本の画家論を配し、東西美術論として編輯された。他に次巻「近代絵画」を産む契機となったヨーロッパ紀行が加えられている。(参考図版・原色版四葉、写真版五十二頁)

第十一巻 美術の巻の第二である。長篇評論「近代絵画」を主体に、西洋美術小論が付せられている。(参考図版・原色版七葉、写真版五十六頁)

第十二巻 多数の読者を得た連載エッセイ「考へるヒント」を、文明批評的なものと近世思想家論の二つに大別し、これに最近のエッセイを配して編輯されている。著者の現在を語る巻である。



「モオツアルト」稿



■内容組方見本

第十卷ゴッホへ美術論Ⅱ「高野山にて」より

高野山にて

先日、高野山で、有名な明王院の赤不動を初めて見た。傳説では、園城寺の黄不動とともに智證大師筆といふことになつてゐるが、専門家の間では、制作年代については種々の説があるやうである。私のやうな素人には、その邊の消息は知り難いが、率直に言へば、評判ほどの名畫とは受取れなかつた。印象は薄弱であつた。いつか博物館で「黄不動」の模寫を見たことがあるが、それにもはるかに劣るとさへ感じた。青蓮院の「青不動」に比べればこれはもう問題ではないと思つた。

「阿彌陀二十五菩薩來迎圖」もちやうど蟲干しで、靈寶館に陳列されてゐたので、久し振りで見て、感動を新にした。毎日飽かずながめた。私は、美術史などには暗いから、印象からいふ他はないのだが、この來迎圖と赤不動は、あんまり違ひ過ぎる。題材の相違、信仰對象の相違、宗教的儀禮形式の相違、さういふことではない。もつと根本的な、畫としてのリアリテイの相違を感じた。それは、畫家の現した美しさのはつきりと感得出来る相違の問題なのであるが、残念ながら、これはうまく言葉には言ひ現し難いのである。

畫に何が描かれてゐるかといふことは畫の價值を決めるものではない。どういふ風に描かれてゐるか、その描かれ方に一切はかゝつてゐる。これほど解り切つたことはない筈なのだが、實際には、まことに意外なほど大多數の人々が、その中には教養のある人々も含れてゐるのだが、何が描かれてゐるかが先づ氣にかゝり、知らず知らずのうちに、それを基として畫を判斷してゐるのである。線だと

第一回配本／六月十日

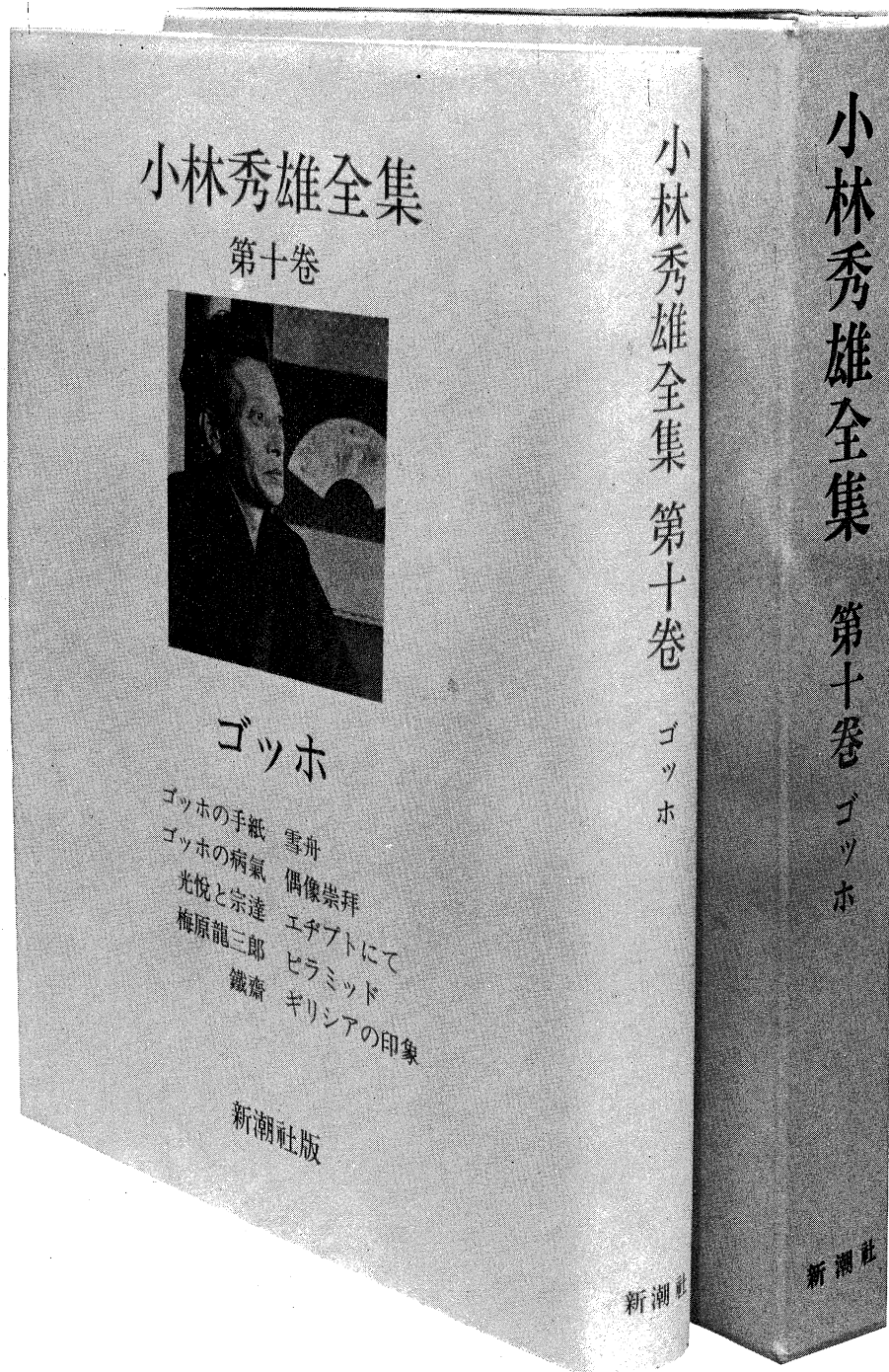
第九卷／私の人生観

第二回配本／七月十日
第十卷／ゴッホ

A5判・9ポ一段組
背皮・金箔押し・カバー付・箱入豪華本
各巻、平均三五〇頁
本文特麗上質紙使用
口絵写真一丁・図版多数・付録八頁収録

価各一三〇〇円

※以下毎月一冊刊行



新潮社

東京都新宿区矢来町71 TEL(260)1111 振替東京808